5　インドネシア

伝統に根ざした現代ファッション

佐藤百合

花開くインドネシア・ファッション

ここ四、五年の間に、オフィス街で見かける女性たちがオシャレになり、デパートの婦人服売り場は一段と華やかさを増した。デパートに外国の有名ブランド品が各種揃っているのはいうまでもないが、それよりも女性たちの目を引きつけるのは現地の若手ファッションデザイナーの手になる、国内ブランドものである。一九八〇年代の半ば過ぎから、新進気鋭のデザイナーが独自のブランドを引っ提げて続々登場してきた。彼らはパリや西ドイツへの留学で箔をつけ、モダンな単色の色使いや最先端の技術を学んできたが、その根っこにはインドネシア的なものが脈々と流れている。ワンピースの図柄に大輪の花があり、鶏が戯れ、馬が躍る。蠟纈の技法を思わせる点描の模様がある。しかし、単なる伝統への回帰ではなく、柔軟な発想で大胆に新しさを生み出していく。たとえば、草木染めのような渋い緑に光沢あるショッキング・ピンクを組合わせる色使いとか、スカートの裾や襟ぐ

りを斜めにカットしてしまうデザインとか、日本人の生真面目さからは想像もつかないことを、ちょっとしたおしゃれ着でやってしまう。

インドネシアは近年、アジアの繊維・衣料品の輸出基地として急成長しているが、労賃の安さで稼ぐ輸出の量のみならず、国内ファッション業界のソフト面の進歩にも目を見張らされる。この国がもともと持っている、間口の広い、奥の深い「衣」文化が、海外ファッション情報の流入や近年の縫製技術の向上、合成染料の多様化などに支えられて、一挙に花開いた感がある。

伝統染織の宝庫

現代の都市社会に開花したインドネシア・ファッションのルーツは、一万三千もの群島に二五〇以上あるといわれる民族集団が、それぞれ独自の技法で自給してきた、日常着としての多種多様な布地にある。インドネシアは世界でも有数の伝統染織品の宝庫なのだ。

その中で、世界中に最もよく知られているのはジャワ島のバティック（batik）であろう。日本でも最近のエスニック・ブームを待つまでもなく、古くからジャワ更紗の名で知られている。バティックは、インドネシア語で「蠟纈染め」の意味で、薄手の木綿布に蠟纈染めで草木やモザイク模様を描いた布地であり、ソガ染料の茶褐色と藍の二色合わせが最も伝統的とされている。けれどもこれはソロを中心とする中ジャワ様式で、ジャワ各地にはヨーロッパの絵画風なモチーフや多彩色のバティックもあり、一口にバティックといっても中味はさまざまである。今では、蠟纈ばかりでなく描き染めや型押し染めも含めて、模様染め一般を指す語として、世界共通語にな

っている。ほかにインドネシア語で世界共通の染織用語となっている言葉に、絣に当たるイカット（ikat—インドネシア語のもとの意味は「縛る、縛るための紐」）や、絞りに当たるプランギ（pelangi—もとの意味は「虹」）がある。ちなみに、日本で言うサラサは、ポルトガル語からきた外来語だが、その語源はインドのグジャラート州の地名スラート（Sulat）とも、古ジャワ語で多彩色なモザイク模様を意味するスラサ（serasah）だとも言われている。インドネシア語は、こと「衣」文化に関する限り、世界への進出度が高いようだ。

スルタン王家の墓所を参拝するバティックのサロン姿の女性たち（中ジャワ，イモギリにて）

熱帯アジアの文化、サロン

もう一つ、比較的知られているのがインドネシアのサロンである。もとは刀の鞘などの「鞘」を意味するサロンは、腰に巻く長い布の両端を縫い合わせて筒状にした腰衣のことで、布という意味のカインをつけてカイン・サロンともいう。布の筒に身体を入れ、余った布地をウ

エストに折り込んで留める。一枚の布地が仕立てた衣服へと進化する第一歩が、このサロンであったろう。

筒状の腰衣は、熱帯アジアに広く見られるようで、インドネシア、マレーシアでサロン（sarung）、ビルマではロウンジー（lounji）、タイやラオスではパーシン（pha sin）、南スマトラや北フィリピンではタピス（tapis）と呼ばれるほか、インドや南アラビアでも同様のものが使われているという。地域によって布の丈や巻き方にバリエーションがあるが、基本はサロンと同じである。日本ではサロンという呼び名が最も親しまれているとみえて、『広辞苑』にも載っている。

バティックのサロンに、クバヤと呼ばれる薄地の上衣（脇より下の胸当てと長袖の上着からなるが、正式の場では上着は着ない）を着るのが、伝統的な女性の日常着である。けれども現在では、女性のバティックのサロン姿は、都会へ行くほど少なくなり、二極分化しつつあるようだ。つまり、結婚式などの伝統儀礼やパーティなどたまの機会に手描きや蠟纈染めの高級バティックで正装する姿と、パサール（市場）のおばさんの作業着レベルで活躍している量産型のプリント地のバティック姿である。

日常の中の伝統

そのジャカルタの生活で、日常的に目にした忘れられないバティックのひとつは、ジャワの生薬、ジャムゥ売りである。若い娘がキュッとひきしまったバティックのサロン姿で、黄色や茶色の液体の入った数本のガラス瓶を籠にいれて背中に布

でくくりつけ、足早に売り歩く。バティック姿は産地直送のトレードマークである。スーパーに行けば粉末になったジャムゥが簡単に手に入るが、彼女たちが目の前で調合してくれる液体の方が美容と健康にずっと良く効くと庶民に信じられているのには、やはり売り娘さんのバティック姿が一役買っているのだ。

バティックのサロンなど身につけなくなった都会の女性でも、一度はお世話になるバティック布が、おんぶ紐ならぬ、だっこ布、カイン・ゲンドン（kain gendong）である。インドネシアでは、赤ん坊はふつう背負わず、左の脇腹に抱える。そして、赤ん坊のお尻をすっぽり包んだ細長い布を、斜めに背中から右肩に渡し、肩口でもう一方の布の端と交差させてちょっと挟み込むだけでよい。インドネシアの子供の体格は小さく、また這わせる習慣もないので、子供一人について二年近くはカイン・ゲンドンのお世話になるのである。

くつろぎの時間

一方、男性の服装は、年々、背広姿への画一化が進んでいる。

部屋着でくつろぐ女性たち

仕事着としてはもちろん、パーティでの正装も背広が定着してきた。一九八〇年代半ば頃までは、パーティはバティックの上衣と決まっていたが、最近ではバティックはすっかり普段着感覚になっている。けれども、少し自由なパーティなら絹糸を織り込んだイカットなどで装うことができる分だけ、日本人男性よりよほどオシャレの幅は広い。外ではバリバリの背広姿でも、家に帰ればさっそくサロンに着替えてくつろぐという、サロン愛好者は都会にあっても少なくない。サロンの開放感に一度慣れると、なかなか手放せないものらしい。

女性の部屋着は、サロンでなくワンピースがもっぱら多い。ウエストを締めつけないことが、くつろぎの条件として大事なのはどこも同じだ。暑い国ではなおさらである。パサールで安く手に入る簡単な部屋着にも、昔ながらのモザイクや草木をあしらった模様が生きている。生活の片隅に、伝統に培われたセンスが顔を覗かせている。

〔参考文献〕

(1) 吉本忍「ジャワ更紗と、その周辺」(『岡田コレクション――インドネシアの更紗展　図録』、板橋区立美術館、一九八九年)。

(2) Sylvia Fraser-Lu, *Handwoven Textiles of South-East Asia*, Singapore, Oxford University Press, 1989.

(さとう　ゆり／アジア経済研究所地域研究部)